

漢字は具体的な言葉が多いのですが、日本語は非常にそれが少ないのです。

たとえば「みる」という言葉は面白い言葉です。いろいろな意味で使います。目で「みる」のはもちろんですが、味を「みる」、熱さ加減を「みる」というように使います。味なら目でみると思う人はいないし、熱さならこれは手でみるしかない。脈を「みる」も同様です。

このようにいろいろな使い方をします。でも、どれも言葉としては「みる」になってしまいます。そういう意味では、日本語は非常に抽象性に富んでいます。

「みる」の漢字の成り立ちについて説明しましょう。

「見」という字は目の働きですから、目という字が基礎になります。その下に何かあるかという、人という字です。この字は人と目とでつくられた漢字です。つまり会意文字です。人は目でどうするのか？「見る」という意味がここから出てきます。

しかし、このときの「見る」というのは目の働きとしての「みる」ですから、単に見るというときに使う字です。

「視」という字は、神様を意味する“しめすへん”がついています。こ

れは神様を祭るときに、手落ちはないかという気持ちでみることです。やり残しはないだろうか、という態度で「視る」ことをいいます。したがって、上司が「視察に来る」などというときにはこの字を使います。